

古代山城の立地環境——百濟・新羅との比較を通して——

山田 隆文

はじめに
日本における古代山城の築造は、『日本書紀』の記述によつて、

百濟の滅亡とその後の復興軍の敗戦に起因する。その際に我が国に

渡來した百濟の亡命官人達が古代山城の築造に深く関わつていたこ
とが知られる。しかし、日本の古代山城の全てが百濟の様式で築造
されたのかというと、必ずしもそうではなく、例えば大野城の門跡
で出土した門扉軸摺金具や、屋嶋城の懸門構造など明らかに新羅山
城で特徴的な要素も見られることは周知のとおりである。そのた
め、日本の古代山城を研究する場合、その比較検討対象は、百濟地
域だけではなく、新羅、高句麗、伽耶を含めた韓半島全体としなけれ
ばならない。

古代山城の立地環境については、国内の事例との比較研究は盛ん

におこなわれており、山城の導入期の戦略上の重要な拠点に山城が單
独で立地している段階から、駅路や官衙に近接した場所に築造され

る段階に変化していることが、これまでの研究で明らかにされてき
た。しかし、この変化の歴史的な背景について、特に古代山城のルー
ツである朝鮮半島の状況との積極的な比較研究は、筆者の管見では
知ることができていない。筆者はこれまで新羅の王京と地方都市の
構造と変遷過程の復原や、朝鮮古代三国の城壁築造技法について継
続して取り組んできたことから、この変化を山城導入時期における

百濟の地方拠点の立地環境に対する思想から、律令制下における統
一新羅の地方都市の立地へ環境に対する思想への変化が影響してい
る可能性があるのではないかと想定していた。

そこで本研究では、古代山城と近接する官衙に着目し、朝鮮半島
の古代国家である百濟の地方統治機関であった「五方城」および、
統一新羅の地方都市である「九州五小京」の治所の立地環境と比較
研究をおこなうことで、その特徴や相互の影響の有無などの検討を
おこなうこととした。特に、山城の自然地理学的な立地状況
だけでなく、官衙施設や墳墓との位置関係、そして同地域における
百濟から新羅への遺跡の立地の変化などについてと歴史地理学的方法
を応用し、さらに考古学的な調査研究成果も加えることで、より
詳細な検討をおこなうこととした。

今回の研究で研究対象として現地踏査を実施した遺跡は、十五カ
所である。ここで、その遺跡名を列挙しておく

百濟西方城推定地・東方城推定地・中方城推定地・南方城推定地
新羅西原小京・中原小京・南原小京・完山州治・発羅州治
日本鞠智城・屋嶋城・大宰府・筑後国府・豊前国府・長門国府・
讃岐国府

以下、まずは現地踏査と情報収集で得た知見を中心に各遺跡の立
地環境の特徴について報告する。

一・百濟五方城の立地環境

百濟は、聖王一六年（五三八）に熊津城から泗沘城に遷都した後に、その版図の地方統治体制として五方を設置したものと考えられる⁽¹⁾。五方については、『周書』や『北史』といった中国の正史や『翰苑』という唐代の類書にその存在が記されている⁽²⁾。五方とは、中方・東方・南方・西方・北方の五つであるが、実際の地理的位置は必ずしも字義の方位通りではなく、概念的なものである。方の中には方城が設置され、長官である方領や郡将が統治していた。ここでは、五方城の情報について文献史料に記された情報を（第1表）としてまとめておく。五方が各々、現在のどこに存在していたのかは、多くの研究者が文献史料を基に考察してきた。その結果、中方城と東方城が置かれた地域は多くの研究者の比定が一致し、北方城である熊津城は現在の忠清北道公州市の公山城であることが確実でいばかりか、南方城と西方城にいたっては方城が設置された中心地が現在のどの地域に存在したかすら、見解の一致をみていないのが現状である⁽³⁾。先行研究で方城の具体的な山城への比定を試みた一人が、徐程錫である⁽⁴⁾。徐程錫は、『翰苑』に記された「其諸方之城、皆憑山険為之」に着目し、「山険」とは険山のことと解釈し、標高二五〇m前後の山に方城が築造されたものと推定し、文献史料の考証から推定される方城の候補地域で、『翰苑』に記される方城の規模に合致し、標高二五〇m前後に所在する具体的な山城に位置比定を試みた。

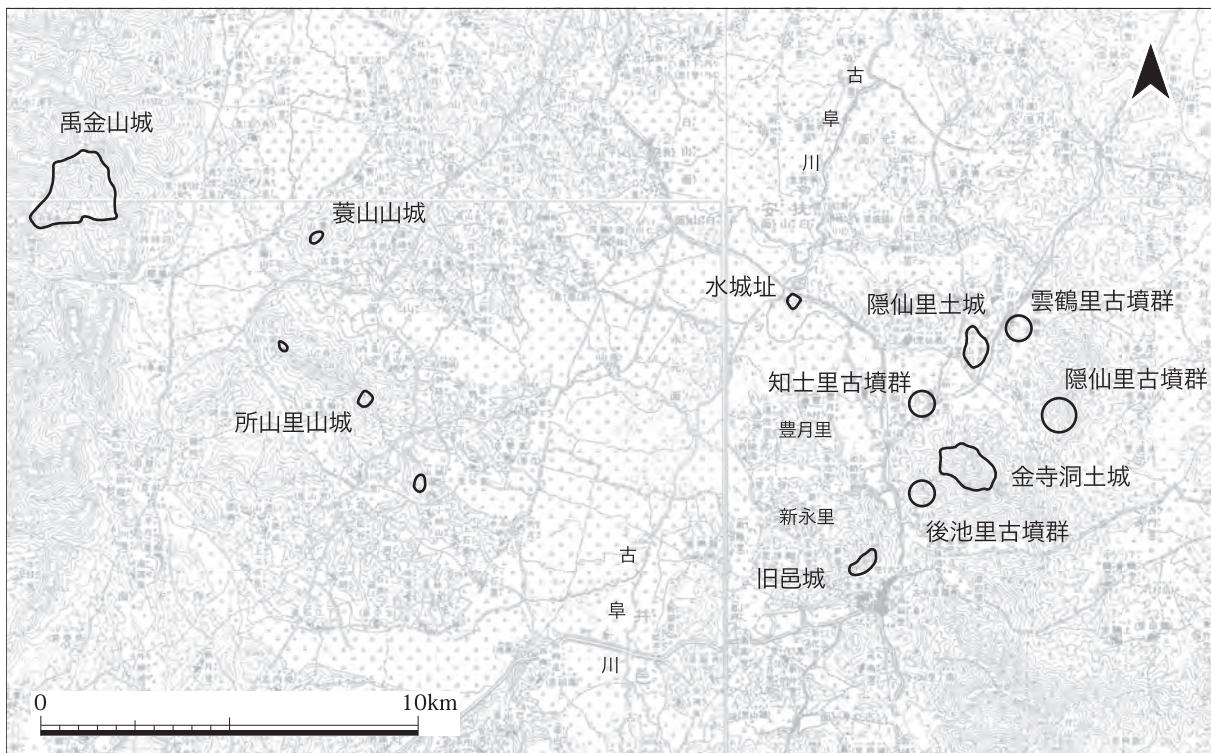
筆者は、今回の研究で北方城以外の候補地を踏査し、徐程錫が比定する山城も訪れてみた。その結果、詳細は後節の個々の項目で述べるが、徐程錫の比定地は標高と規模に固執したために、五方の各方城が統治した地域全体をみたとき、奥地すぐりの立地、文献に記される城内外に七〇〇～一〇〇〇人もの民衆が暮らすには狭隘な周辺地形に違和感あるよう感じざるをえなかつた。そこで、本稿では、方城について筆者の踏査結果に基づく候補地案も提示したい。

（一）中方城

中方古沙城は、『三国史記』の雑志地理にも「古阜郡、本百濟古眇夫里郡」とあるように、先行研究でも全羅北道井邑市の古阜面に所在するということで、見解は概ね一致している。具体的にどの城が中方古沙城であるかは不明であったが、二〇〇四～二〇〇六年に実施された発掘調査の成果から、古阜面古阜里に所在する旧邑城が

第1表 百濟五方城一覧

	城名	規模	都からの距離	比定地
中方城	古沙城	方150歩	南260里	古阜
東方城	得安城 德安城	方1里	東南100里	恩津
南方城	久知下城 卞城	方130歩	南360里	南原、羅州、光州、長城、金溝、求礼
西方城	刀先城 力光城	方200歩	西350里	礼山、唐津、瑞山、羅州
北方城	熊津城	方1里半	東北60里	公州



第1図 百濟中方城推定地 (1/200,000)

○は、百濟時代の古墳

方城である可能性が高くなつた^(五)。百濟に特徴的な構造の石築城壁や五部五巷制を示す「上部上巷」銘の印章瓦が出土したのである^(六)。旧邑城は、黄海に注ぐ東津江の支流である古阜川（八旺川）の東岸にある標高一三〇m程度の独立した低丘陵に立地する。城周は約一・〇kmで、基本的には二つの山頂を囲んだ山頂式の構造をしており、北西の山腹で小規模な谷部を閉塞している。

旧邑城の北東には山頂二三〇mの山塊があり、ここに金寺洞山城がある。かつてはこの山城を中心にそのさらに北側の隠仙里土城がある低丘陵との間の北西に開いた谷部一帯が中方城との学説も提示され、羅城の存在まで想定されていたが^(七)、その想定範囲内には、大規模な封土墳である知士里古墳群や、陵山里型石室が主体部である隠仙里古墳群の他に、雲鶴里古墳群、塔立里古墳群など多くの古墳群が分布することから^(八)、金寺洞山城の北側の谷地が中方の施設や中心的な居住地があつたと考えるのは、難しいと判断する。では、中方城の中心居住地はどこにあつたと推定できるのか。筆者は旧邑城と古阜川の間にあつたと推定できる。古阜面新永里・豊月里の低丘陵が立地上は最も相応しいと推定する。ここでは現在二カ所の遺物散布地が知られるが、今後の調査に期待したい。

古阜川の西岸の舟山面にも南北方向の広大な低丘陵が広がり、そのうちのいくつかの高い頂上部には、小規模の山城が点在している。さらにその西側の扶安郡上西面の山地には、百濟復興運動の拠点のひとつ周留城の有力候補地のひとつである禹金山城が所在する。しかし、中方は、百濟の泗沘期には特に軍事的緊張はない地域であったとかんがえられることから、井邑市北隣の金堤市にある百濟時代の灌漑施設である碧骨堤に象徴されるとおり、東津江流域一

帶の広大な穀倉地帯を管轄する行政的な役割を果たすことが主眼の施設であつたと推定する。

(二) 東方城

東方得安城の所在地は、現在の忠清南道論山市・恩津面一帯といふことで、見解は一致している。『三国史記』雜志地理にも「德殷郡、本百濟德近郡、景德王改名、今德恩郡」とあり、この徳恩郡が後に恩津県となることから、恩津地域に得安城（徳安城）が設置されたものと推定されている。徐程錫は、論山市内に所在する山城のかで規模と標高を勘案して恩津面南隣の鍊武邑と可也谷面の境界にある城周約一・五kmの梅花山城を東方城に比定した（九）。

論山地域は、西隣に百濟の王都である泗沘、北隣に旧都の熊津、南隣に別宮のある金馬渚があり、東は新羅との国境紛争地域に繋がるという百濟にとって最も重要な拠点のひとつであった。なお論山地域は、現在は忠清南道の論山市という一つの行政区域であるが、新羅の半島統一後には、論山川北岸を熊川州の管轄、南岸を完州の管轄とに分割するという措置がとられていた。この措置は、新羅が論山地域を重要視もしくは危険視したからこそ、意図的なものであつたと筆者は推定する。

論山地域は、錦江の支流である論山川の流域にひろがる平野で、東と南北の三方を山地で囲まれ、論山川が錦江に合流する西側に開いている。論山川の南岸の恩津面と北岸の城東面には広大な低丘陵が形成されている。論山川の上流の谷筋は、錦山郡や茂朱郡に通じるルートで、三国時代末期はここを新羅軍が侵攻してきたとされ、谷筋から論山平野に出たすぐの一帯が六六〇年の百濟滅亡直前の激

戦地として知られる黄山原の推定地である。

山城や古墳群の分布も、この黄山原推定地である論山川や連山川・魯城川の川沿いに近い山地や山麓に集中している。山城は論山と公州を結ぶルート沿いに拠点的な魯城山城が築造され、黄山原の周辺には黄山城をはじめ小規模な山城が多数配置されている。古墳群の分布については、論山川沿岸に近い古墳群は熊津期のものがほとんどで、泗沘期のものは可也谷面の六谷里古墳群しか確認されていないことから、中心地が移動したとみる見解があつた（一〇）。しかし、近年の発掘調査で泗沘期の古墳が六谷里だけでなく、同じ論山平野の南東を画する山麓の可也谷面山老里と鍊武邑東山里でも確認されている（一一）。



第2図 百濟東方城推定地 (1/400,000)

◇は百濟時代の山城、○は百濟時代泗沘期の古墳

さて、梅花山城は、新羅の進軍ルートからも、旧都であり北方熊津城である公州方面や金馬渚の王宮がある益山方面への交通路からもかなり離れ、居住や農耕の適地である恩津の低丘陵からも離れた場所の山地であり、論山地域の山城の分布からみると異質な存在といえる。このことから、梅花山城の最も近くに存在する六谷里古墳群から銀花冠飾が出土したといつても、それと、「険山」なる立地条件をもつて梅花山城周辺が東方城の中心地であるとするのは無理があると筆者は考える。

防衛上も、行政上も重要な交通路となる論山江沿いの丘陵か山地に方城を設置したとみるべきで、金英心も指摘しているとおり、地志に百濟義慈王の行幸地伝承の記載がある丘陵北端の論山市登華洞に所在する皇華山城が東方城の候補地のひとつとみるべきではないかと考える（二一）。そして、墳墓の分布状況を勘案すると、論山川に面した低丘陵一帯が東方の中心地で、その南側の後背山麓に墓域が設定されたのではないかと考えられる。

（三） 南方城

南方久知下城は、百濟五方城の中で最もこの所在地の見解が割れている。これまでの先行研究で具体的に提示されたものを列挙すると、全羅北道の金溝、南原、全羅南道の長城、求礼、光州、羅州がある。（第一表参照）筆者は、先行研究の検討の結果、全羅北道の南原市と全羅南道の羅州市の二カ所に絞って現地踏査を実施した。

a. 南原地域

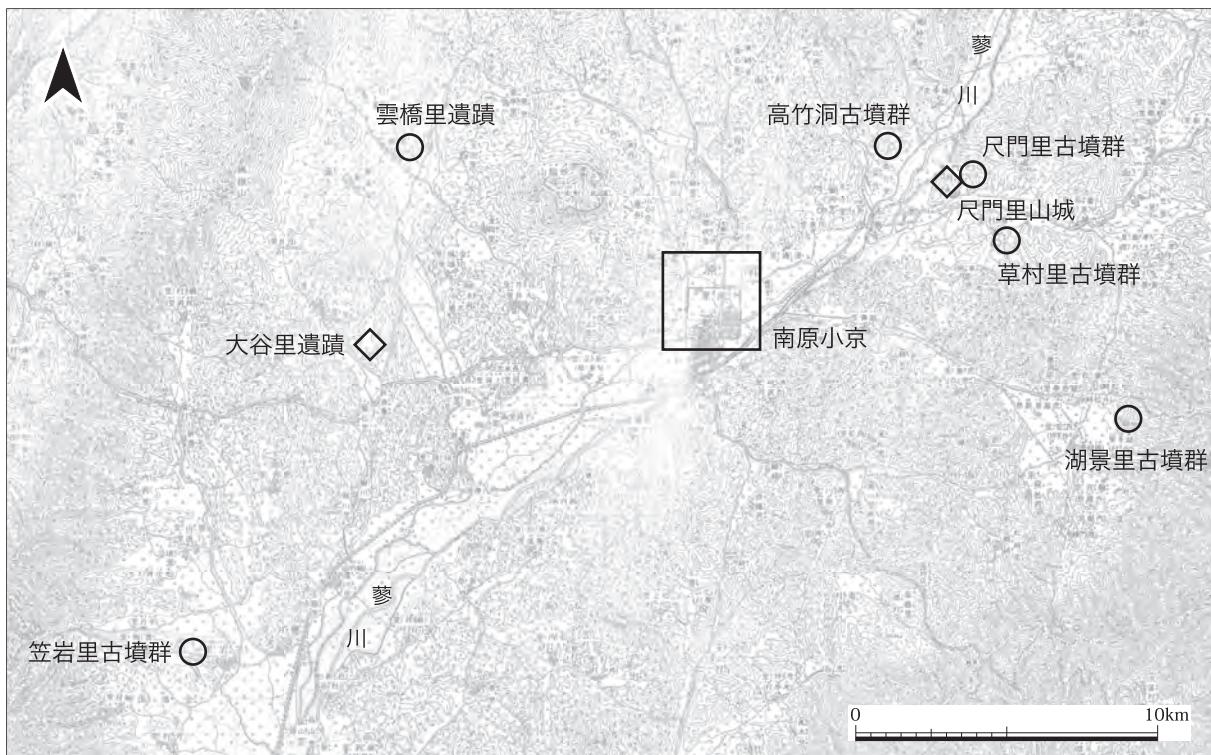
南原地域は、『三国史記』にもとは百濟の古龍郡で、新羅の神文

王代に南原小京が設置されたことが記述される。小京の立地の詳細については、次章で述べるとして、本節では南原地域の百濟遺跡の分布と立地について述べる。

南原地域は中央に蟾津江の支流である蓼川が北東から南西に流れ、北西岸には平地が広がるが、南東岸は川沿いすぐまで山地が迫る。現在の南原市域で確認された百濟遺跡は、大きく四カ所に区分できる。一つ目は、南原小京のすぐ東の対岸である二白面・朱川面の一帯。二つ目は、南原小京から蓼川を四kmほど下った大山面一帯。三つ目は、南原小京から蓼川を八・五kmほど下った金池面・周生面一帯。四つ目は、南原中心部から山を隔てて東側の雲峰邑・引月面・阿英面・山内面の一帯である。

一つ目の地域で特筆すべき遺跡は二白面尺門里古墳群で、ここからは銀花冠飾が出土している。古墳群のある丘陵の上には城周五七〇mの尺門洞山城が存在する。発掘調査は実施されていないが、百濟土器や瓦片が採集されたようである（二三）。尺門里古墳群からペガム川を挟んで南側の草村里の丘陵上にも百濟古墳群の存在が知られる。ただ、これらの古墳群と山城はかなり近接していること、ペガム川沿いは平地が少ないとから、ここを百濟時代の中心部とみるのは難しいと推定する。ただ、草村里から山を隔てた南側のウオンチヨン川の上流の朱川面長安里一帯には比較的広い平地がひろがっており、平地の東端には百濟時代の湖景里古墳群も分布しておらず、注目される。

二つ目の南原中心部から下流に約四km下った蓼川の北岸に広がる大山面のヨ川と嶺川の流域では、三国時代の住居跡が大谷里遺跡から、古墳が雲橋里遺跡で確認されている。



第3図 南原周辺の遺跡（1/250,000）
 ◇は山城・集落遺跡、○は百済時代の古墳

三つ目はさらに約5km下流で、蓼川の北西側から注ぎこむ支流である楓村川流域も比較的広い平地部を有する。三国時代の遺跡は合流点近くの笠岩里古墳群が知られる程度であるが、笠岩里の東隣に所在する甕井里に古龍マウルという南原の百済時代の地名を冠した集落があり、注目される。

四つ目の雲峰邑をはじめとする南原市東部は、中心部とは全く異なる水系で、南江を経て洛東江へと繋がる地域で、伽耶諸国の大伽耶と国境を接している。新羅統一後も先の二地域とは別に東側の善州速含郡（後に康州天嶺郡に改称。）に属す雲峰県となっている。しかも、雲峰県の旧名が阿莫城とあり、この城名は六〇二年に新羅の城として『三国史記』に登場することから（四）、少なくとも七世紀初頭には新羅領域になっていたことがわかる。ただ、この地域の特筆すべきものとして阿英面月山里古墳群を挙げておきたい。月山里古墳群は、五方の設置以前の四～五世紀のものであるが、出土遺物に中国南朝製の青磁鶏首壺があり、これまでの出土分布から百済との密接な関係性が指摘されている。しかし、出土土器の大部分は大伽耶様式のものであることから、発掘調査報告書でも述べられており、被葬者は大伽耶に近い在地勢力で、百済と大伽耶を連絡させる役割を担っていたとみるのが妥当であろう（五）。

以上、四カ所の候補地について検討してみたが、まず雲峰地域は七世紀初頭には新羅の領域となることから、候補地から外れるが、残りの三カ所も南方城が設置されたと判断するには決定打に欠ける。特に五六二年に大伽耶が新羅に併合されると南原地域は百済と新羅の国境紛争地帯の最前線となる。そもそも南原地域は、蟾津江水系という自然地理学的には全羅南道に属すという立地であるにも

関わらず、統一新羅時代に完山州の区域とされて以来、現在も全羅北道に属している。この異質な状況は、この地域の軍事的側面を重視したからと考えられるが、五方城の機能が国防上の兵站としての性格が強かつたと推定するのであれば、南原が南方城であつた可能性は高くなるが、行政経営的な地方統治機関という側面で五方城を評価するならば、南原を南方城とみるのは難しいかもしない。

b. 羅州地域

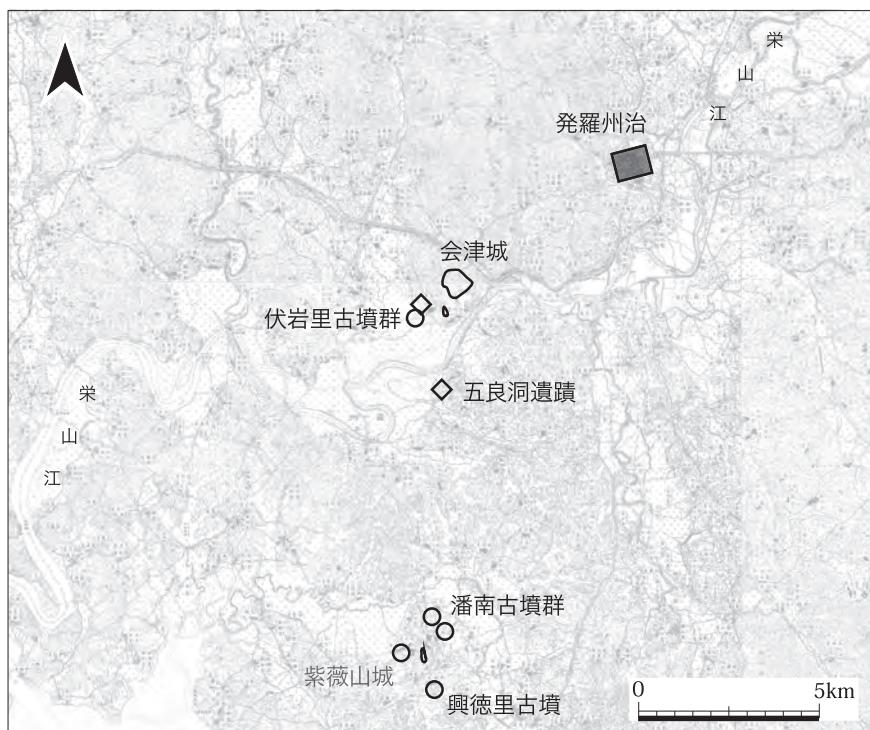
羅州地域は、『三国史記』の記述によると、榮山江の北岸は、もと百濟の発羅郡で、新羅統一後当初は発羅州の州治が設置されたが、神文王代に武珍への州治の変更に伴つて郡に格下げされたことが知られる。一方、榮山江の南岸は、もと百濟の半奈夫里県を新羅統一後に潘南郡としたと記述される。古くは全榮来が西方城に比定したこともあるが、近年は南方城の候補地のひとつである（二六）。

百濟時代の遺跡も同様に北岸と南岸とに分布の中心がある。北岸には多侍面の会津里にチャメ山城、銀花冠飾が出土した伏岩里古墳群が分布し、南岸には潘南面に紫薇山城、山城の麓に潘南古墳群（大安里・新村里・徳山里）、山城の南側の丘陵麓に銀花冠飾が出土した興徳里古墳が分布している。

やはり注目すべきは、伏岩里と興徳里から銀花冠飾が出土したことである。羅州市や南隣の靈岩郡の榮山江流域は、もとは百濟から独立した馬韓勢力の中心地であり、大型甕棺を主体部とした独自の墓制が六世紀代までは盛行されていたことはよく知られる。この地域にあって、銀花冠飾が出土した伏岩里三号墳五号石室・一六号石室、興徳里古墳の石室は、陵山里型の石室ではないものの、百濟後

期の典型的な切石による石室であり、出土遺物だけでなく、百濟の中央政権との強い結びつきを感じさせるものである。また、伏岩里遺跡から出土した木簡群も重要な資料である。

榮山江南岸の羅州市から旺谷面、新北面そして潘南面にかけての広大な低丘陵地帯は、農耕だけでなく、工業生産の基盤となるに充分な安定した土地であり、実際、丘陵北端部の榮山江にほど近い五良洞遺跡で甕棺用の大型甕の窯や工房、居住地が確認されたことは



第4図 羅州周辺の遺跡 (1/200,000)

◇は三国時代の集落遺跡、○は三国時代の古墳

周知のとおりである（一七）。

榮山江流域は完全に百濟の支配下に入つて以降、軍事的な緊張があまりなかつたと推測されるが、倭国や耽羅との通交、巨大な穀倉地帯という意味では、非常に重要な地域であつたことは間違いない。このような行政経営的側面を評価すれば、羅州に南方城を比定することも可能ではないかと筆者は考える。

（四）西方城

西方刀先城も所在の候補地が多数提示されている。その中で全榮來は唯一、羅州・靈岩地域に西方城を比定したが、その他は忠清南道の北西部と推定し、瑞山郡・唐津郡・礼山郡の名が挙げられている（第一表）。

徐程錫は、文献の考証と自身が定義した規模、標高に見合う場所として、忠清南道洪城郡長谷面山城里の無限川西岸の標高二二二mの山に所在する城周約一・二kmの鶴城山城を西方城に比定し（一八）、さらに、百濟復興運動で黒齒常之が拠点とした任存城と西方城は同一のものであると推定した（一九）。

任存城については研究も盛んで、現状では礼山郡大興面と光時面、洪城郡金馬面の境に所在する鳳首山城が有力視され、史蹟指定も整備事業も「任存城」の名称でおこなわれている。鳳首山城は、標高四八三mの鳳首山に築造された城周約二・四kmの山城である。これまでの調査で百濟時代の土器や瓦が出土したことであるが、百濟時代の明確な遺構は検出されていない。石築の城壁面も一部遺存しており、筆者も現地で観察し、複数の積み方が存在することを確認したが、外面や断面観察のみで百濟と断定できるものはな

かつた。また、徐程錫も指摘したとおり、この地域を描いた古地図の中には、任存城と鳳首山を明確に区別して描いているものが存在することから、現時点ではまだ任存城と断定すべきではないと筆者は考える。

徐程錫が西方城に比定した鶴城山城は、鳳首山城から無限川をさらに上流にさかのぼった山間部に立地する。牙山湾に注ぐ無限川の河口からは実際に約三三kmも内陸に位置することとなる。山頂からの眺望も現地で確認したが、周辺の無限川流域の谷地しか見ることができなかつた。西方城が忠清北道の北西部にあるということは、その軍事的役割は、北の高句麗に対する国防であり、さらに海の西侧に存在する南朝や隋、唐との通交を担つていたと想定される。とすると、鶴城山城はその内陸奥地すぎる位置で、西方の中心地として



第5図 百濟西方城推定地 (1/400,000)
◇は百濟時代の山城、○は百濟時代の古墳

の役割を果たせるのであろうか。筆者は、極めて困難であると言わざるをえないと考える。

では、西方の中心地はどこで、西方城はどの城に比定することができるのであろうか。鶴城山城や鳳首山城が面している無限川は、挿橋川と合流して牙山湾に注ぎ込む。その合流点の内側の新岩面と吾可面には広大な低丘陵が広がる。無限川の東岸は山地が氾濫原の間に迫り、挿橋川の西岸もほぼ同様の地形をしている。筆者はこの一帯を西方の中心地の候補として注目している。中央の低丘陵では百濟時代の城郭が確認されていないが、無限川東岸の礼山邑山城里には礼山山城、挿橋川西岸の合徳面大川里には金後山城、合徳面上長里には上長里土城が、鳳山面侍洞里には侍洞里山城（大天台山城）と小天台山城が、それぞれ百濟時代に築造された可能性がある山城として挙げることができる（10）。城の規模を考慮すると、城周九六五mの礼山山城が標高はわずか五五mだが、有力候補となると考へる。また、これらの山城群は相互に目視することができる位置に配置されていることから、「翰苑」に記された「諸城左右亦各小城、皆統諸方。」という状況に適った立地であると筆者は考へる。さらに、これらの山城群の近隣である挿橋川西岸の鳳山面孝橋里や古徳面四里、挿橋邑沐里などから、泗沘期の古墳が発掘調査で多数確認されていることも、筆者の考へを補強できるものと考へる。

二・新羅九州五小京の立地環境

新羅の地方行政組織としての九州五小京は、文武王代に整備が本格化し、幾度かの治所の変更を経て、神文王七年（六八七）の沙伐州の再設置をもって、最終的な九州五小京が完備された。

九州五小京の所在地比定や構造復元の先行研究は多くなく、筆者が全体系的な都市構造の復元研究に取り組むまでは、朴泰祐と李丙贊の一氏しか全体系的に扱った研究はなかつた（11）。

筆者は二〇〇八年に発表した研究のなかで、九州五小京の都市構造はほぼ全て方格の街区を整備したものであつたことが、遺存地割や地形、発掘調査成果から復元できるとの見解を示し、復元図を提示した（12）。その時点で、踏査が不十分であつた遺跡については、その後も現地踏査を継続して実施し、現在では「ほぼ」ではなく「全て」が方格街区を備えた都市であつたと考えるようになつた。

近年は、以前よりは九州五小京が遺跡として認識されるようになり、増加した発掘調査事例をもとに、検証する研究もみられるようになつてている（13）。

本研究では、都市構造の復元が主眼ではなく、もう少し広範囲に小京や州治が立地する環境を現地踏査によって観察し、百濟の五方城推定地の立地環境と比較することとした。そのため、今回の現地踏査の対象は、熊津期から泗沘期の百濟の領域に設置された、中原小京、西原小京、南原小京、発羅州治、完山州治を選定した。

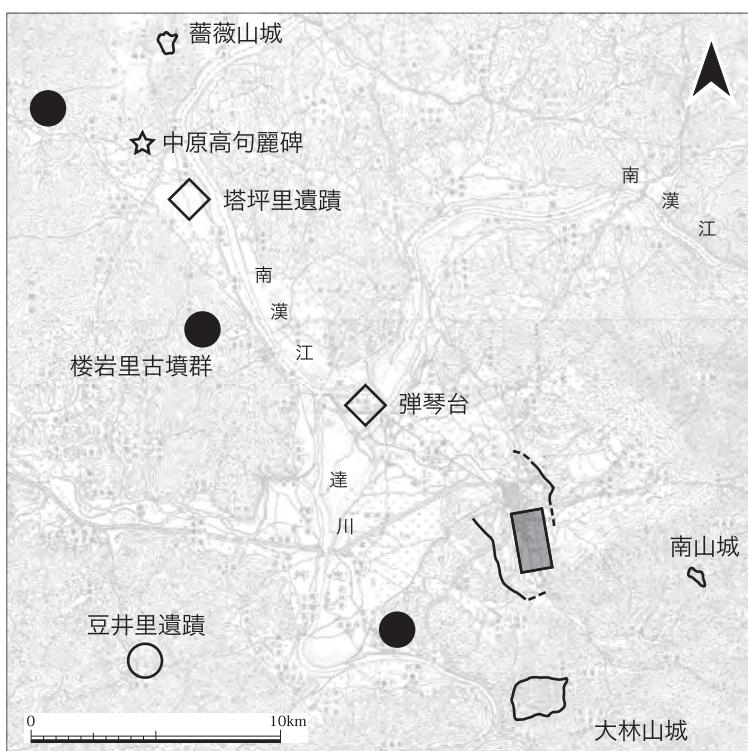
次に各遺跡について現地踏査に基づく検討結果を順に報告する。

（一）中原小京

中原小京は、現在の忠清北道忠州市に所在する。この地に新羅が小京を設置したのは真興王一八年（五五七）のことであるが、それは「国原小京」であった。地方行政組織としての「中原小京」の整備は、早くとも文武王一三年（六七三）と推定される（14）。新羅がこの地を領有する前は、高句麗の国原城で、さらにそれ以前は百濟

の領域であつたことが発掘調査成果からも判明しており、まさに三国係争の地域であった。

中原小京の遺跡は、南漢江の南岸に位置しているが、直接面してはおらず、南北と東の山地と南西側の低丘陵によつて隔てられた小盆地に南漢江の支流である忠州川と龍山川によつて形成された東西が○・五〇・七kmと非常に幅の狭い平地部に立地している。この平地部の遺存地割から、南北軸が北で約一〇度西に振つた東西三坊×南北一坊の南北に細長い方格街区を備えた都市遺跡が復元できる(二五)。東側の山地には三国時代に築造された南山城が、南側の達



第6図 新羅中原小京 (1/300,000)
◇は三国時代の遺跡、○は三国時代の古墳
●は、統一新羅時代の古墳

川に東岸に面した山地には統一期に築造されたと推定される城周約4・5kmの大林山城が配置されている。

真興王代に設置された国原小京は、中原小京の位置とは異なり、忠州中心部から北西に約七・五km離れた、南漢江西岸の南北に細長い河岸段丘上の塔坪里遺蹟一帯である可能性が発掘調査成果から高くなつた。そのすぐ北側で西から南漢江に注ぎ込む支流の北岸には五世紀前半に立てられたと推定される中原高句麗碑があり、この支流沿いの一帯が、忠州地域を高句麗が領有していた時の中心地であつたことが想定できる。高句麗碑の北側の山上には薔薇山城が存在する。石築の城壁は新羅によるものとの見解が示されているが、先行する柵列は高句麗の築造の可能性もある(二六)。碑文の内容から、高句麗は、この地を新羅から奪取したことがわかるが、南漢江と達川、忠州川の合流点にある弾琴台と称される丘陵周辺では、百濟の製鉄遺構が多数確認されており、忠州地域を百濟が領有していた時期もあつたことが判明している。

忠州地域における三国時代から統一新羅への中心地の立地環境の変遷をまとめると、百濟は主要河川の合流点付近の低丘陵とその周辺に拠点を置いた。その後、忠州を領有した新羅や高句麗は、南漢江沿いの河岸段丘と支流沿いの平地に拠点を置き、その後背山地には山城を配置した。統一後の中原小京の方格街区は、支流の忠州川と龍山川に面した平地部に整備され街区の南側の後背山地には、統一新羅時代に特徴的な大規模山城が築造された。以上のように、忠州は古代の拠点の変遷、特に三国各々の占地の特徴を考えるうえで、非常に好例であるといえる。

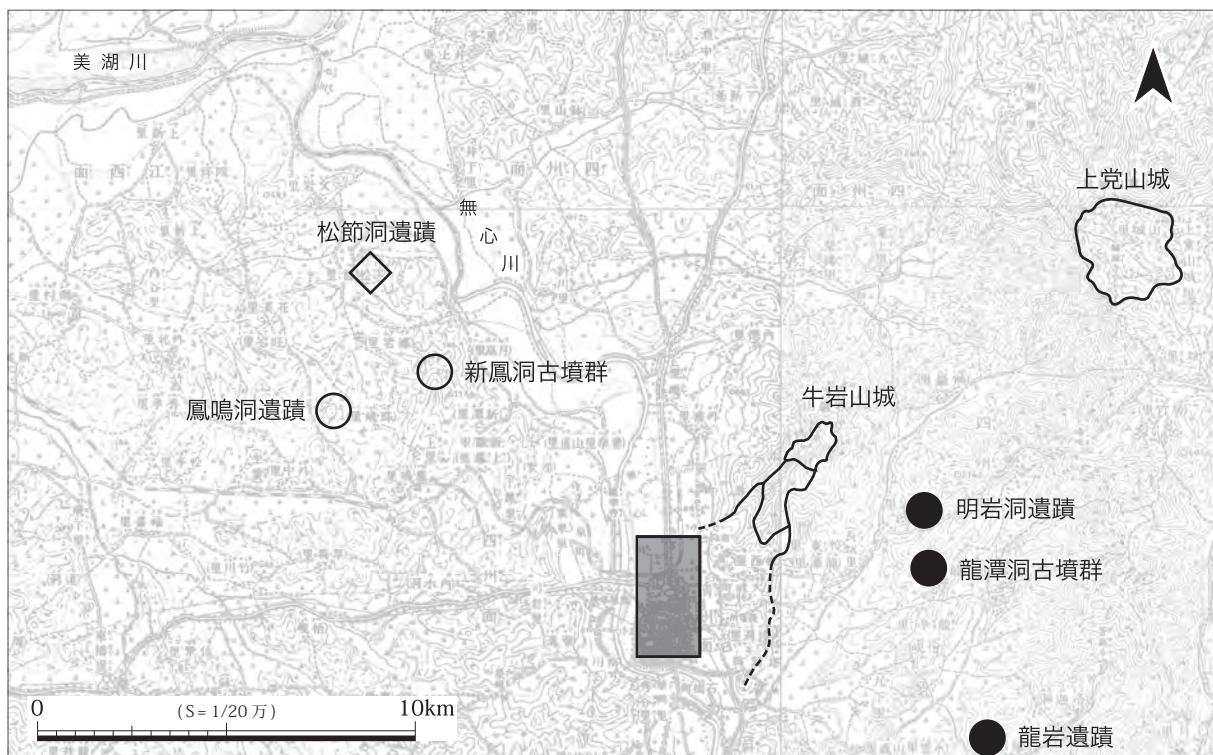
(二) 西原小京

西原小京は、現在の忠清北道清州市に所在する。神文王五年（六八五）に設置されたことが記録されるが^(二七)、『三国史記』雜志地理・百濟条によると、もとは百濟の臂城もしくは、子谷と記されている。これまでの発掘調査成果からも、清州地域が新羅による支配以前は百濟の領域であったことを示す遺跡が多数確認されている。以下、小京の立地と百濟時代の遺跡分布と変遷について報告する。

西原小京の街区は、美湖川の支流で、北流する無心川の東岸で南北に連なる牛岩山との間の幅〇・七km程度しかない南北に細長い平地部に立地する。遺存地割や現地踏査による地形の検討から、東西四坊×南北一〇坊の南北に長い長方形の街区が復元できる^(二八)。東側を画する牛岩山の山上には牛岩山城が築造され、そのさらに東側の山地には、城周約四・二kmと大規模な上党山城が築造される。神文王九年（六八九）の築城記事は、上党山城の築造を示したものと筆者は推定する^(二九)。また、これらの山城の間の山腹の明岩洞・龍潭洞・龍岩洞には多くの統一新羅時代の古墳が分布している^(三〇)。

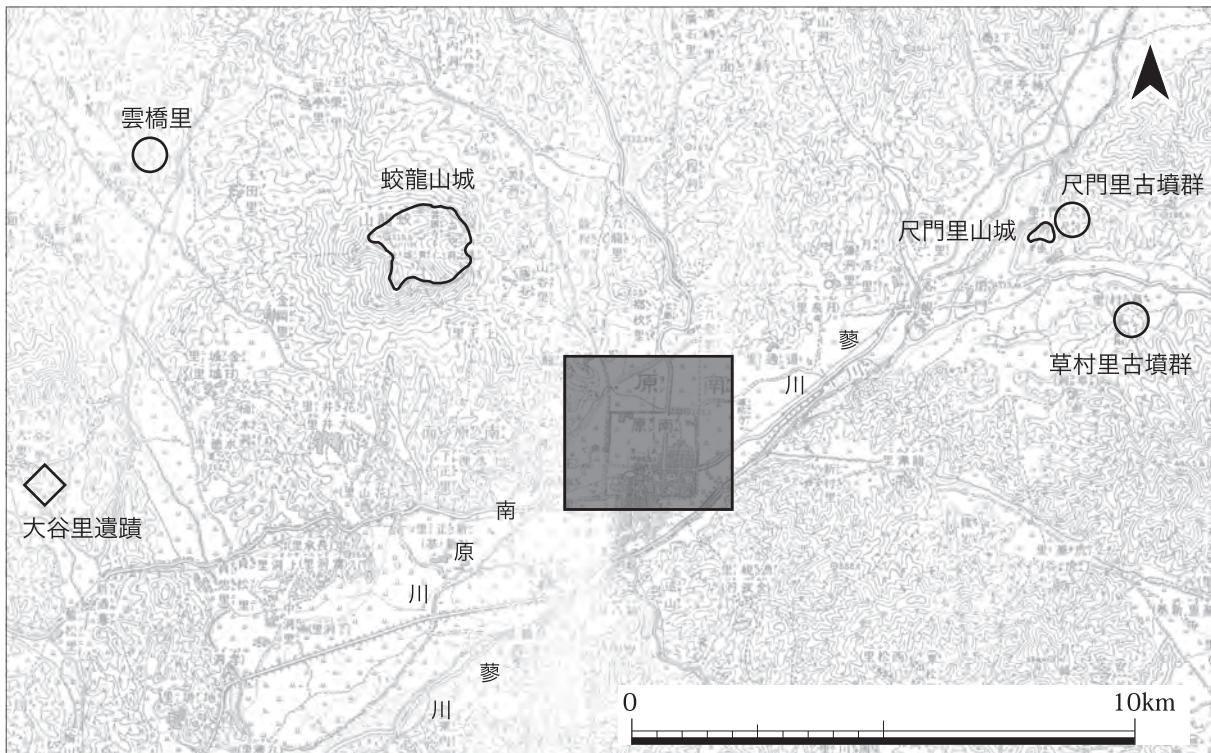
一方、百濟時代の遺跡の多くは、無心川の西岸に分布している。西岸には広大な低丘陵が広がっており、無心川に面した丘陵の東端部の松節洞遺蹟で百濟時代の多数の住居跡が、新鳳洞・鳳鳴洞・松節洞で百濟時代の古墳群が確認されている。このことから、無心川と美湖川の合流点に近い松節洞を中心とした丘陵地が百濟時代の中心地であった可能性は高い^(三一)。

以上のように、清州では、百濟時代の無心川西岸の丘陵上から、統一新羅時代の無心川東岸の平地に中心地が遷されたことがわかる。



第7図 新羅西原小京 (1/200,000)

◇は百濟時代の集落、○は百濟時代の古墳、●は統一新羅時代の古墳



第8図 新羅南原小京 (1/150,000)

◇は百濟時代の集落、○は百濟時代の古墳

(三) 南原小京

南原小京は、先に百濟の南方城の検討でも述べたとおり、全羅北道南原市に所在する。『三国史記』によると、もとは百濟の古龍郡で、神文王五年（六八五）の設置記録が残る（三一）。

小京は、北東から南西へと流れる蟾津江の支流である蓼川と、その支流である南原川の間に形成された幅一・〇～一・四kmの平地に立地しており、遺存地割から中軸に他の半分の幅八〇mの区画を持ち、中軸の東西各五坊ずつ、南北一〇坊にわたって一辺一六〇mの区画が広がる方格街区が復元できる（三二）。他の九州五小京では、河川の流れる方向や全体的な地形の向きにあわせて軸が斜行する事例が多いなかで、蓼川が斜行するにも関わらず、正方位を指向していることが特徴的である。ただし、李在桓も指摘しているとおり（三四）、南東隅は蓼川の河川敷、北西隅は南原川北西岸の山地であるために、方格の街区を造営することができないため、完全な正方形形状の街区を形成できてはいる。しかし、中軸が存在することを積極的に評価すると、地形に即した変則的な方格街区でなく、理念上は一〇×一〇坊のほぼ正方形の都市を志向していたとみるべきであろう。

南原小京の方格都市から約二・五kmの北西の山地には、城周約三・一kmの蛟龍山城が築造される。筆者は、神文王一年（六九一）の築城記事が、この山城の築造を示したものと考える（三五）。

前章の南方城の項で検討した百濟時代の中心候補地のうち三カ所は、いざれも蓼川の複数の支流によって形成された合流扇状地などに立地しており、そこから主要河川に面した平地部に拠点が遷されたことがわかる。

(四) 発羅州治

発羅州治は、現在の全羅南道羅州市に所在する。『三国史記』によると、もとは百濟の發羅郡で、統一直後に発羅州の州治が設置されたが、神文王六年（六八六）に州治が武珍郡へ変更されたことに伴つて郡に降格されたことが記録される^(三五)。州治となつた時期の記録は無いが、唐が韓半島から撤退した文武王一六年（六七六）以降の設置と仮定すると、わずか一〇年だけ州治であったことになる。州治の具体的な所在地についての先行研究は、筆者の管見では知らないが、朝鮮時代に造営された羅州邑城の城内外で現状の道路網を観察すると、邑城の城壁を越える範囲に方格地割が遺存している可能性が高いことが判明した。南北方向の地割は、東西幅一二〇～一三〇m間隔で、少なくとも七条存在する。直交する東西方向の地割の残存状況はあまり良くなく、現状では不等間隔で三条確認できた。

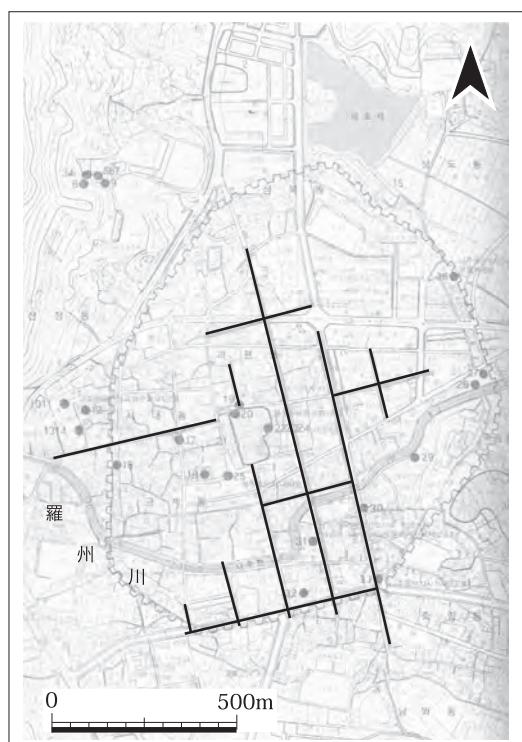
遺存地割が確認された羅州邑城一帯は、栄山江の西岸に形成された河岸段丘の上位面に立地しているが、その平坦面の規模は東西の最大幅一km、南北の最大幅一・三km程度で、決して広いとはいえない。さらに、その中央を東流する羅州川の影響で、やや起伏がある地形であり、ほぼ平坦な平野に立地する他の州治や小京と比較すると、異なる立地条件であるといえる。このような立地条件が州治変更の要因のひとつである可能性もある^(三七)。

州治が所在する河岸段丘から栄山江の下流に直線距離で約五km離れた多侍面会津里に城周約一・四kmの会津城がある。これまでの発掘調査の結果、城壁の築造年代は統一新羅時代と推定されており^(三八)、発羅州治に対応する山城と位置づけることができる。同一河

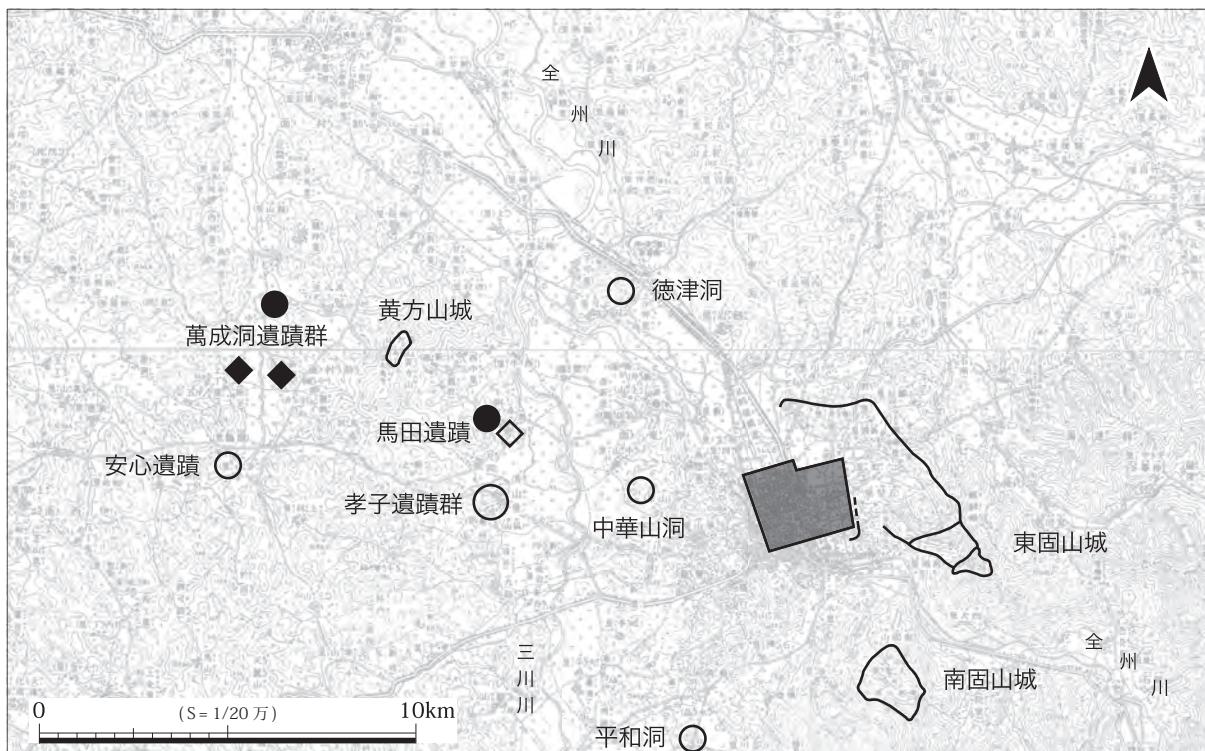
川の沿岸で三～五km程度離れて州治と山城が立地する位置関係は、江原道江陵市に所在する河西州治と溟州山城の位置関係と類似している^(三九)。

(五) 完山州治

完山州治は、全羅北道全州市に所在する。『三国史記』によると、もとは百濟の完山で、別名を比斯伐や比自火といつたと記録される。真興王一六年（五五五）に軍事拠点的な州治として設置されとみられるが、同二六年（五六五）に対百濟戦争の劣勢に伴つて廃止され、大耶に州治が撤退した^(四〇)。なお大耶は、現在の慶尚南道陝川郡陝川邑である。地方行政組織として再び完山の州治が設置されたのは、神文王五年（六八五）のことであつた^(四一)。



第9図 新羅發羅州治推定復元図 (1/20,000)
太線が遺存地割



第10図 新羅完山州治 (1/200,000)
 ◇は百濟時代の山城、○は百濟時代の古墳
 ◆は統一新羅時代の集落、●は統一新羅時代の古墳

南側を山地に囲まれ、全州川などが萬頃江に合流する北側に平野が開いている。州治は、全州川の東岸で、南側と東側を山地に隔てられた平地部に立地している。平地部に遺存する地割の検討から、南北八坊×東西八坊で中軸に幅の狭い区画を持つ街区を復元できる。ただし、中軸より西側では方格の街区はほぼ直角に交わるが、中軸よりも東側では直角にならず、坊は平行四辺形状の形状となるのが特徴である。また、河川の方向など地形の影響で、南北軸が北から一八度程度西に振れている(図10)。

平地を画している東側と、全州川南岸の山地にはそれぞれ城周約一・七kmの東固山城と、城周約三・〇kmとやや規模の大きい南固山城が築造されている。

全市域における百濟時代の遺跡は、全州川と、全州川に西南側にから合流する支流三川川との間に広がる低丘陵上や麓に平和洞、中華山洞などで確認され、さらに三川川西岸の丘陵地帯でも馬田遺蹟や孝子遺蹟群が分布している。

現状の遺跡の分布状況から、断定的なことは言えないが、他の事例と同様に、全州川西岸の低丘陵上の百濟時代の中心地が、統一新羅時代に全州川東岸の平地部に遷されたということは言えそうである。

三、百濟方城の立地と新羅州治・小京の立地の特徴

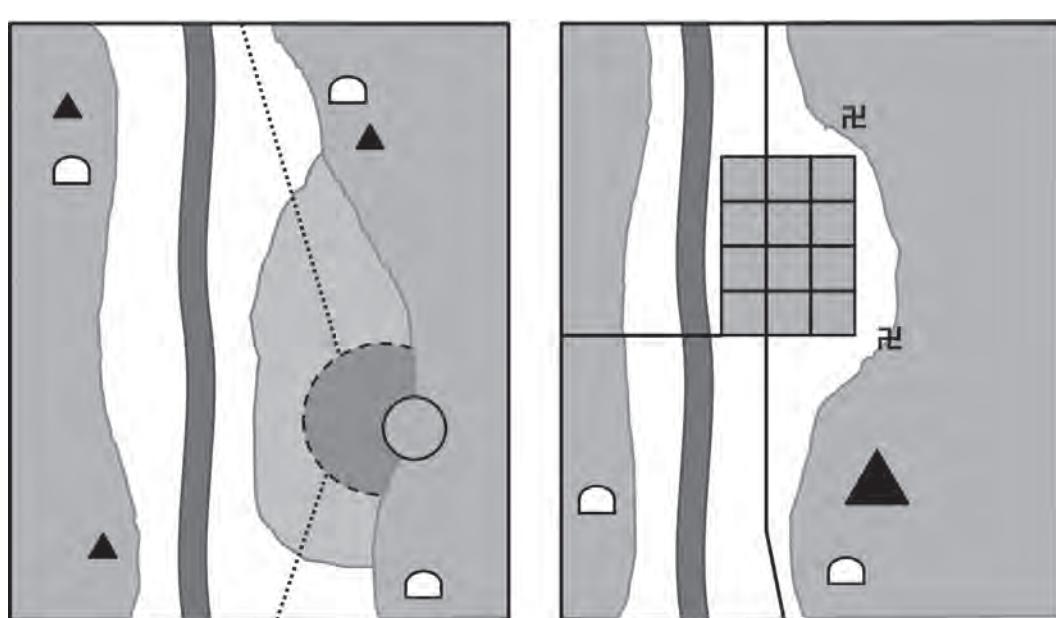
前章まで、百濟の方城と、新羅の小京および州治の立地環境について、既往の調査研究成果と筆者の現地踏査結果に基づいて分析した。本章では、分析の結果、抽出できた百濟の方城と新羅の小京・州治の立地環境の特徴について比較検討したい。

各々の立地環境の特徴を抽出し、まとめたのが第2表で、それぞれの立地モデルを図化したものが第11図である。

大きな相違点は、中心的な施設である方城と州治・小京そのものの立地と構造である。百済の方城が低丘陵の中の高所、もしくは丘陵と山地の結節点に近い低山地に立地し石築または土築の城壁を廻らせた山城を築造しているのに対して、新羅の州治と小京は、河川に面した平地に城壁の無い碁盤の目状の方格街区を造営している。立地条件がまったく異なるということは、新羅がそれぞれの地域の中心地を前代から引き継がずに、別の場所に新たな中心地を創り出すということを地方統治の基本方針としたことを示している。

山城の配置も対照的である。百済の方城では『翰苑』にも記され

るとおり小規模な山城を互いに目視できる範囲に複数配置しているのに対して、新羅の州治・小京では近郊に中・大規模な山城を基本は一つ配置するのみであった。これは三国時代以来、高句麗・百済・新羅の典型的な都城制の形態である平地を引き続き採用した



第11図 百済方城と新羅州治・小京の立地モデル

(左：百済方城 右：新羅州治・小京)

凡例	○ 方城	□ 州治・小京	▲ 山城
	□ 古墳	卍 寺院	—… 交通路

墳墓は、朴淳發が指摘するとおり百済の泗沘期には王都に近接したものと考えられる。すなわち、新羅の州治・小京は都城のミニチュアと位置づけられていたと理解することができよう。

した場所に密集した分布状況から、都城の周辺郊外に分散する分布状況へと変化している（図三）。新羅の墳墓の分布も同様に変化している。逆にいうと、墳墓が分布する地点の直近は方城の中心地ではないと、候補地から除外することも可能かもしれない。

新羅は、統一後に「五通」という官道を版図全域に整備したとされる。五通自体は、『三国史記』で未詳地名に区分されているため、その具体像を史料から知ることはできない。しかし、官道が整備されたなら、それは州治や小京を結ぶか、少なくとも意識はしたルートが設定されたに違いない。残念ながら、韓国では古代の官道遺構が未だ発見されていないが、今後歴史地理学の手法を応用して、治所と官道の関係についても検討する必要がある。

むすびにかえて　—日本の古代山城の立地環境との比較—

本研究では、鞠智城をはじめとする日本の古代山城と周辺の官衙の立地環境についての比較対象として百濟の領域に存在した百濟の五方城と、新羅の九州五小京を選定し、分析と検討をおこなった。紙幅の関係で、今回日本で実施した踏査結果を報告することはできないが、最後に日本の古代山城の立地環境の傾向と百濟・新羅との比較検討の現時点での見解について少し触れておきたい。

日本の古代山城は、六六四年の水城の築造、六六五年の長門の城・筑紫の大野城と櫟城の築造に始まり、六六七年の対馬の金田城・讃岐の屋嶋城・大和の高安城が築造されるまでの段階と、文献史料に記載のない山城が北部九州と瀬戸内に多数築造された段階で、その立地環境は大きく異なる。前者は、対外戦争という極度の緊張状態のなかで、我が国の防衛戦略上で重要と判断された場所に基本は山

城が単体で立地している。一方、後者は広域でみると、北部九州の場合は、大宰府を中心として放射状に整備された官道の沿線に配置されており、山城周辺でみると、官道や官衙の近隣の丘陵や山地に立地している。向井一雄が提唱した「見せる山城」という官道や官衙の方向を意識した城壁の築造状況なども特徴的である（図四）。

百済の方城は、軍事的側面だけでなく、地域の経営という側面を考慮すると、標高二五〇m前後という「陥山」ではなく、「山陥」とは方城が平地ではなく、丘陵や山に立地することを単に示したもので、方城の立地は統治する中心地を見渡せる丘陵や低山地に築造されたとみるのが妥当だと筆者は考える。そして、日本の文献記載のある古代山城は、方城の立地ではなく、百済の王都であった泗沘城の防衛のために周辺に単体で配置された聖興山城や石城山城、魯城山城などの立地と類似するのがほとんどであると考える。

官衙施設と山城がセットとして捉えられる状況は、新羅の九州と五小京の治所と類似するものと考えられる。官衙と山城の位置関係は、山城が治所のすぐ後背山地に築造される場合と、同一河川沿いや交通路沿いで少し離れた場所に築造される場合がある。前者は、中原小京や南原小京、完山州治などで、大宰府と大野城、筑後国府と高良山城、讃岐国府と城山城も同様の立地関係にあると評価できる。後者は、西原小京や、発羅州治などで、豊前国府と御所ヶ谷城も同様の立地関係にあると評価できる。

鞠智城の場合、城が立地する丘陵の南側の平地に菊池郡家跡（菊池市中西寺）があるが、城からは約三・五kmとやや離れている。鞠智城付近には延喜式以前の駅路が通ることが指摘されており、城も郡家もその交通路沿いではあるが、これを新羅と同様のセット関係

と捉えてよいか、それとも菊鹿盆地を見渡す丘陵の先端部にある鞠智城を百濟の方城と類似した立地と評価するべきか、鞠智城の築造年代に関わる重要な問題でもあり、さらなる検討が必要と考える。

なお今後は、百濟山城の立地の検討だけでなく、先述した新羅五通などの交通路の復元研究も進め、統一新羅における官衙・山城・交通路の位置関係との比較研究もより一層深めていきたい。

最後に、本研究にあたり、貴重な機会を与えてくださった熊本県立歴史公園鞠智城・温故創生館ほか熊本県の関係者の皆様に感謝申し上げます。また、現地踏査を実施した際も、多くの方々にご協力、ご教示をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

金洛中、金武重、李康列、李柱憲、李志映、田庸昊、崔寬鎬、小川秀樹、木村龍生、矢野裕介、山口裕平、山元敏裕、渡邊誠

註

(一) 文献には、設置記録が残されていないが、五方城の一つが旧都である熊津城であることから、遷都後に整備されたとみるのが妥当である。

(二) 『北史』卷九四、列伝百濟条「其都曰居拔城、亦曰固麻城。其外更有五方、

中方曰古沙城、東方曰得安城、南方曰久知下城、西方曰刀先城、北方曰熊津城。(中略) 五方各有方領一人、以達率為之。方佐武之。方有十郡、郡將三人、以德率為之。統兵一千三百人以下、七百人以上。城之内外人庶及余小城、咸分隸焉。」

『翰苑』卷三十、蕃夷部百濟条「括地志曰、百濟王城方一里半、北面累石為之、城水可方余家、即五部之所也。(中略) 又国南二百六十里有古沙城、城方百五十步、此其中方也。方繞兵千二百人。国東南百里有得安城、城方一里、此其東方也。国南三百六十里有下城、城方一百三十步、此其南

方也。国西三百五十里有力光城。城方二百步、此其西也。国東北六十里有熊津城一名固麻城。城方一里半、此其北方也。其諸方之城、皆憑山險為之、亦有累石者。其兵多者千人、小者七八百人。城中戸多者千人、小者七八百人。城中戸多者至五百家。諸城左右亦各小城、皆統諸方。」

(三) 本研究で参照した百濟五方城全体に関する先行研究は、次のとおりである。ここでは筆者名と執筆年のみ記す。(参考文献一覧を参照)

全采来一九八八、朴賢淑一九九六、金英心一九九九、徐程錫二〇〇一

(四) 前掲三、徐程錫論文、二五一~三〇八頁

(五) (財) 全北文化財研究院・井邑市二〇〇七『井邑古阜旧邑城I』遺蹟調査報告第一二冊

(六) その後、方城としての「古沙夫里城」の名称で史蹟指定され、発掘調査も継続されているが、断定できる遺物が出土したわけでもないので、筆者は引き続き旧来の名称を使用することとする。

(七) 前掲三、全采来論文、三三三・三四三頁

(八) (財) 全北文化財研究院・井邑市二〇一一『井邑隱仙里C—一二号墳』

(九) 他に金英心なども梅花山城を東方城に比定した。前掲三、金英心論文、九六、一〇〇頁

(一〇) 李漢祥二〇〇九『装身具賜与体制からみた百濟の地方支配』書景文化社

(一一) (財) 中央文化財研究院二〇一五『馬韓・百濟の墳墓文化III—忠南VI・錦山・論山・大田・青陽』

(一一一) 金英心も引用しているとおり、『大東地志』恩津山水条に「皇華台、西北十里、有大石平広、俯瞰津水、百濟義慈王遊宴其上。」の記述がある。

前掲三、金英心論文、九八~九九頁

(一一二) 車勇杰二〇〇五『百濟地域の古代山城』周留城、二九五~二九六頁

(一四)『三国史記』百濟本紀武王三年秋八月条「王出兵、圍新羅阿莫城。一名母山城。羅王真平遣精騎數千、拒戰之。我兵失利而還。」なお、新羅本紀

真平王二四年秋八月条にも対応記事がある。

(一五)(財)全北文化財研究院二〇一二『南原月山里古墳群—M四・M五・M六号墳—』

(一六)崔嬉敬二〇一二『百濟の羅州地域支配と南方城』高麗大学校大学院韓国史学科硕士学位論文

(一七)国立羅州文化財研究所二〇一四『羅州五良洞窯址II 五〇六次発掘調査報告書』

(一八)前掲三、徐程錫論文四八〇五四頁

(一九)『三国史記』列伝 黑齒常之伝「黑齒常之、百濟西部人。長七尺余、驍毅有謀略。為百濟達率、兼風達郡將。猶唐刺史云。蘇定方平百濟、常之以所部降。而定方囚老王、縱兵大掠。常之懼與左右酋長十余人遯去。嘯合通亡、依任存山自固。」

(二〇)他にも挿橋邑上城里の上城里山城も百濟時代の城と指摘されているが、筆者は城の平面形態や城壁の形状から、統一新羅時代の郡治もしくは県治である可能性の方が高いと考える。

(二一)朴泰祐一九八七『統一新羅時代の地方都市に対する研究』忠南大学校大学院史学科韓国史学専攻碩士論文。

李京贊二〇〇二『古代韓国地方都市格子型都市区画の携帯特性に関する研究』『建築歴史研究』第一卷第四号

(二二)山田隆文二〇〇八『新羅の九州五小京城郭の構造と実態について—統一新羅による計画都市の復元研究—』『考古学論叢』権原考古学研究所紀要第三一冊

(二三)黃仁鎬二〇一四『新羅九州五小京の都市構造研究』『中央考古研究』第一

五号、(財)中央文化財研究院

李在桓二〇一六『統一新羅時代の九州と五小京の考古学的研究』滋賀県立大学大学院人間文化学研究科博士学位論文

(二四)『三国史記』新羅本紀貞興王一八年条「以國原為小京。」、同文武王一三年秋九月条「築國原城。」

(二五)前掲二二、山田論文、三八頁では、東西六坊×南北六坊以上と推定したが、その後の虎岩洞遺蹟で統一新羅時代末期以降に築造された土築城壁の発掘調査成果と分布範囲を踏まえて、再度踏査をした結果、現在は東西三坊×南北一一坊が妥当と考える。なお、黃仁鎬は東西五坊×南北九坊と、李在桓は東西二坊×南北九坊に復元している。

(二六)なお筆者は、石築城壁の築造も技法が新羅の整層積とは異なり、高句麗で一般的にみられる長菱形の石材を多用している場所を確認したことから、石築城壁も初築が高句麗による可能性はあると考える。

(二七)『三国史記』新羅本紀神文王五年春三月条「置西原小京、以阿浪元泰為仕臣。」

(二八)前掲二二、山田論文、三五〇・三六頁では、東西五坊×南北七坊と推定したが、今回の踏査の結果、東西四坊×南北一〇坊が妥当と判断した。なお、李京贊は東西三坊×南北一一坊、黃仁鎬は東西三坊×南北一一坊、李在桓は東西三坊×南北一一坊に復元している。

(二九)『三国史記』新羅本紀神文王九年条「築西原小京城。」なお、牛岩山城は、山上から西側の平地部に下る城壁が確認されているが、筆者はこれを後三国の動乱期に築造された羅城と推定している。詳細は別稿に譲る。

(三〇)ソンジエヒヨン二〇〇二『清州地域出土新羅土器の編年と性格』『湖西考古学』第六・七合輯

(三一)ただし、無心川の東岸に百濟時代の遺跡が全く分布していないわけで

はなく、明岩洞遺蹟からは百濟時代の古墳も検出されている。

(三一) 『三国史記』新羅本紀神文王五年春三月条「置南原小京。徒諸州郡民戸

分居之。」

(三二) 前掲二三、山田論文、三三～三四頁

(三三) 前掲二三、李在桓論文、八一～九六頁

(三四) 『三国史記』新羅本紀神文王二年春三月条「築南原城。」

(三五) 『三国史記』新羅本紀神文王二年春三月条「發羅州為郡、武珍郡為州。」

(三六) 『三国史記』新羅本紀神文王六年条「發羅州為郡、武珍郡為州。」

(三七) もちろん地理的要因ではなく、在地勢力との関係性など政治的要因も想定できる。

(三八) 国立羅州文化財研究所二〇一〇『羅州会津城発掘調査報告書』

(三九) 山田隆文二〇一二「九州五小京と済州（河西州）—その都市構造を中心にして」『文化財』第四五卷第一号。なお、武烈王五（六五八）年に設置された河西州治は、南大川北岸の平地部に方格の街区が存在することを確認でき、そこから西南西に約三kmさかのぼった同じ北岸に城周約一・六kmの済州山城が築造されている。

(四〇) 『三国史記』新羅本紀真興王二六年春正月条「置完山州於比斯伐。」、同二六年秋九月条「廢完山州 置大耶州。」

(四一) 『三国史記』新羅本紀神文王五年春条「復置完山州。以龍元為摠官。」

(四二) 前掲二二、山田論文、二一・二三頁

(四三) 朴淳發二〇一六「百濟の都城と墓域」『東アジア古代都城と墓域』二〇一六年度百濟研究所国際学術会議、忠南대학교百濟研究所

(四四) 向井一雄二〇一七『よみがえる古代山城—国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館、一四〇一二二二頁。なお、日本の「見せる山城」と同様の城壁の築造状況が、新羅の州治や小京とセットになる山城にもみられるこ

とは、前掲二三、山田論文、一五・一九頁で指摘したとおりである。

参考文献

古典籍

『三国史記』、『翰苑』

韓国文献（便宜上、日本語に訳して掲載する。）

国立公州博物館二〇一一『韓国の冠』国立公州博物館研究叢書第二四冊

国立羅州文化財研究所 二〇一〇『羅州会津城発掘調査報告書』

国立羅州文化財研究所 二〇一三『栄山江流域古代山城』栄山江流域文化遺産支援化學術調査報告V

金英心 一九九九「忠南地域の百濟城郭研究—地方統治と関連して—」『百濟研究』第三〇輯、忠南대학교百濟研究所

朴泰祐 一九八七『統一新羅時代の地方都市に対する研究』忠南대학교大学院史学科韓國史学専攻碩士論文

朴淳發二〇一六「百濟の都城と墓域」『東アジア古代都城と墓域』二〇一六年度百濟研究所国際学術会議、忠南대학교百濟研究所

百賢淑 一九九八「百濟泗沘時代の地方統治と領域」『百濟の地方統治』韓国上古史学会

徐程錫 二〇〇二『百濟の城郭—熊津・泗沘時代を中心として』学研文化社

ソンジエヒヨン 二〇〇二「清州地域出土新羅土器の編年と性格」『湖西考古学』第六・七合輯

李京贊二〇〇二「九州五小京と済州（河西州）—その都市構造を中心に—」『文化財』第四五卷第二号

李漢祥 二〇〇九『装身具賜与体制からみた百濟の地方支配』書景文化社

（財）嘉耕考古研究所・礼山郡 二〇一七『礼山地域百濟山城学術調査研究報

